様　式　C－19、F－19－1、Z－19　(共通)

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　6 年　5 月 31 日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：18K00575

研究課題名（和文）日本語と英語における語種と複合語の関係から見た借用の一般理論

研究課題名（英文）A General Theory of Borrowing from the Perspective of Word Classes and Compound Words in Japanese and English

研究代表者
今井　忍（IMAI, Shinobu）

大阪大学・日本語日本文化教育センター・教授

研究者番号：20294176

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：動詞の語種（和語、漢語、外来語）に着目し、それらがどのような文法的特徴を持つかを考察した。和語の中でも「読み書きする」「行き来する」のような複合的な動詞は「開閉する」「往来する」のような漢語動詞および「コピーする」「チェックする」のような外来語動詞と同等の特徴を持つことが分かった。このような複合語と借用語（漢語、外来語）の類似性は、それらがいずれもそれまで日本語になかった新しい複雑な概念を表すという性質を持つためであることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
サ変動詞の文法的特徴については、従来数多くの研究がなされてきたが、それに語種がどのように関わるかについては体系的な研究はなされていなかった。本研究は、単純語から複合に至る複数の形式について意味的な特徴も考慮しながら、そのパターンを明らかにした点で学術的な意義がある。また、この成果は日本語教育への応用も期待される。日本語学習者は漢語や外来語の習得に困難を感じることが多いが、日本語教育においては語種を体系的に扱うことはほとんどない。本研究の結果は、そのような状況を改善する一助となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：I focused on the types of verbs (native Japanese, Sino-Japanese, and foreign loanwords) and examined their grammatical characteristics. It was found that compound verbs comprised of native Japanese morphemes, such as "yomikaki suru" (to read and write) and "ikiki suru" (to come and go), possess the same characteristics as Sino-Japanese verbs like "kaihei suru" (to open and close) and "o:rai suru" (to come and go), as well as foreign loanwords like "kopi: suru" (to copy) and "chekku suru" (to check). This similarity between compound words and loanwords (Sino-Japanese or foreign) is due to their nature of expressing new complex concepts that were not previously present in the Japanese language.

研究分野：言語学

キーワード：語種　複合語　動詞　借用語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本語の語種（和語、漢語、外来語）の理論的研究については、従来、音韻論的観点からの分析が多くを占めており、形態統語論的観点からの研究はそれほど積極的になされてこなかった。しかしながら、サ変動詞との複合（サ変動詞との複合（「*読みする」「*食べする」 vs. 「読書する」「休憩する」「コピーする」）、接尾辞「～中」の後接（「*読み中」「*書き中」 vs. 「読書中」「休憩中」「コピー中」）、といった点で語種間の差異が認められること、これらの現象においては、和語単純語 vs.和語複合語・漢語・外来語という対立が見られることから、特に動詞に関して語種とその形態統語的特徴に着目することで、日本語の形態的特性に関して新たな視点を見出すことが可能であると思われる。

一方、日本語以外の言語に目を向けると、英語においては、ゲルマン由来の語彙とロマンス由来の語彙の間で、与格移動（dative shift）の可否や句動詞への生起の可否といった点で差異があることが指摘されてきた。歴史的観点からすると、日本語の和語が英語のゲルマン由来語、日本語の漢語が英語のロマンス由来語に当たると言えるが、英語における句動詞への生起の可否（句動詞にはロマンス由来の動詞が生起しない）は、日本語における語彙的複合動詞への生起の可否（語彙的複合動詞には漢語動詞が生起しない）と類比的に捉えられる。また、ベトナム語における漢越語の動詞についても本来語と借用語との形態統語的相違があることを示唆するデータも見られる。

これらのことから、他言語から語彙を多く借用している言語について、本来語の動詞と借用語の動詞の間に形態統語的に体系的な違いが見られることが示唆される。それぞれの言語においてどのような特徴があるかを調査し、記述的な一般化を示すことで、動詞が表す意味に関する重要な知見が得られると考えられる。

分析の枠組みとしては、P. Štekauer らが提唱する onomasiological approach が適していると考えられる。onomasiological approach は、新しい概念に対する名づけとして語形成を位置づけることによって、複合語の慣用性の問題を解決している点が特徴である。今井（2013）では、借用と複合語形成が名づけという点で共通していることを指摘しており、onomasiological approach に借用という概念を採り入れることで新たな理論的展開を示すことが可能である。

借用と語形成の共通点という観点からは、2017 年 9 月のヨーロッパ言語学会第 50 回年次大会における *The Interaction between Borrowing and Word Formation* と題されたワークショップにも注目に値する。ワークショップの趣意書では ” Borrowing and word formation are two of the most prominent naming devices that are invoked when new concepts need to be named. ” と述べられており、このトピックが学界で一定の注目を集めていることが示されている。

２．研究の目的

本研究では、日本語と英語の語種と複合語について、形態統語的な側面、及び、意味的側面を分析することにより、それらの間の共通点を明らかにし、そこからどのような通言語的な一般化が可能かを考察することが目的である。日本語と英語においては、基層語である和語と上層語である漢語との間に体系的な違いが見られるが、和語の複合語は漢語と同様の性質を示すことが明らかになっている。一方、英語でも基層語であるゲルマン由来語と上層語であるロマンス由来語の間に体系的な違いがあることが明らかになっているが、複合語についてはまだ考察されていない。これらの研究を統合することで、両言語の語彙体系のこれまで知られていなかった側面を明らかにすることが目的の一つである。

また、両言語についての考察から、語種に関する通言語的な一般化を提案し、それを近年の研究動向の中に位置づけることももう一つの目的である。

３．研究の方法

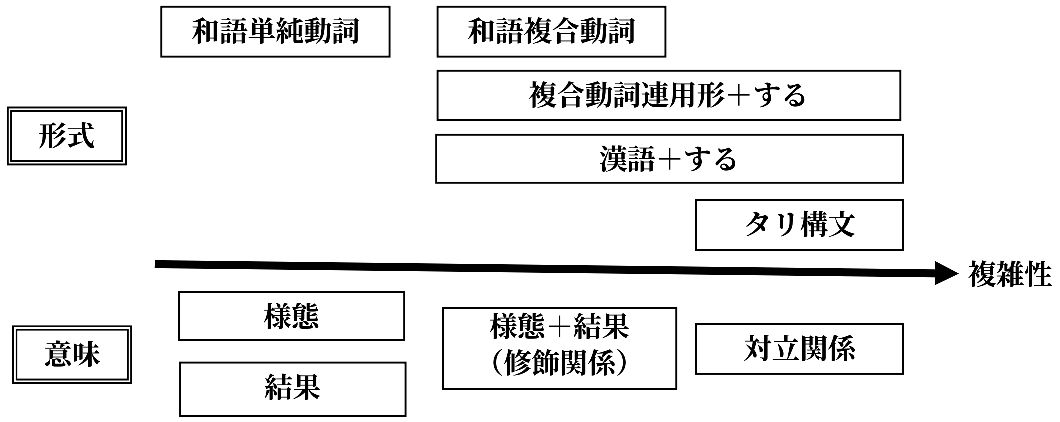
まず、日本語に関しては、和語複合語と漢語との共通点と相違点について記述的な整理を行う。特に、語種は何か、単純語か複合語か、サ変動詞と共起するかしないか、複合語前項と後項との意味関係はどのようなものか、という点に着目する。そこから得られた記述的な一般化を基に、それが名づけという観点からどのように位置づけられるかを考察する。

次に、英語に関しては、動詞の語種に関する先行研究を探索するとともに、日本語で得られた知見に基づき、記述的な整理を行う。特に、句動詞や結果構文といった日本語の複合語と一定の対応を持つと考えられる形式について、語種に関する制約があるかといった点に着目する。

最後に、日本語と英語に関する記述的な一般化が成り立つ理由を明らかにし、それが理論的にどのように位置づけられるかを考察する。

４．研究成果

日本語については、動詞述語における語種と複合語は概略以下のような分布をなすことが明らかになった。



ここでは、和語単純動詞（「飛ぶ」「泳ぐ」「出す」「つく」など）にはLevin and Rappaport Hovav (2006)が示した「様態と結果の相補性」が働くのに対し、和語複合動詞（「飛び出す」「泳ぎつく」など）は様態と結果を一語内で表すことができること、<複合動詞連用形＋する>（「書き込みする」「読み書きする」「開け閉めする」など）は小林（2004）による漢語動詞分類における「対立関係」を表すことができること（cf.「*読み書く」「*開け閉める」）、対立関係は、統語的構文であるタリ構文でも示されるような関係であること（「読んだり書いたりする」「開けたり閉めたりする」）、という分布が示されている。全体的には、形式の複雑性と意味の複雑性が相関する類像的な関係が成り立つと言える。

さらに、影山（2010）が指摘する動作主複合語は漢語と複合動詞連用形に限られること（「スピルバーグ｛*作り／製作｝の映画」「村上春樹｛*書き／書き下ろし｝の小説」）、「〜中」に前接する要素も漢語と複合動詞連用形に限られること（「{*建て／建築／建て替え}中の家」）からも、漢語動詞と<複合動詞連用形＋する>が同等の性質を持つことが示された。

英語については、Harley (2008)で動詞の語種と統語的な特性との関係が議論されていることがわかった。Harley (2008)の議論は、基本的に与格移動に対する制約が動詞の語種と関わっているという現象に対して理論的な説明を与えるというものであるが、語種と複合語との関係に関して、"Latinate verbs are fundamentally verb-particle constructions" (Harley 2008: 72-73)と述べている。すなわち、ロマンス由来の動詞は句動詞と同等であるということであり、このことは日本語において漢語動詞と複合動詞及び<複合動詞連用形＋する>が同等であることに通じる指摘であると言える。

しかし、Harley (2008)はロマンス由来の動詞と句動詞との共通性を複形態素（bimorphemic）であるということに求めており、その点で、日本語において形容動詞あるいは形容詞になり得る形態素がどのようなものであるかを論じたNishiyama (1999)と同じ立場に立っていると言える。Nishiyama (1999)は" NAs are loan words or polymorphemic, while CAs are native and monomorphemic."(NAは形容動詞、CAは形容詞を指す）という一般化を提唱しているが、ここでもやはり借用語と複形態素の要素が同等に扱われている。ただし、Harley (2008)とNishiyama (1999)の重要な相違は、日本語には外来語という要素があるのに対し、英語にはそのような要素がないということである。外来語は単形態素であるにもかかわらず、漢語（原則的に複形態素）や和語複合語と同等のふるまいをするため、Harley (2008)のように複形態素性だけでは説明が不可能である。一方、Nishiyama (1999)は"loan words or polymorphemic"という定式化によってその問題を回避しているが、なぜ借用語と複形態素であることが選言で結ばれるのかについては説明がなされていない。

本研究では、借用語と複合語が新規に導入されたと見なされる概念である点で共通していることを指摘し、それによってこの問題を解決することを試みた。このように考えることで、外来語がなぜ単形態素であるにもかかわらず漢語や和語複合語と同等のふるまいを示すかが説明可能となる。

【参考文献】

今井忍（2013）「語種と複合語：意味論的観点から」『日本語・日本文化』40:65-77.

影山太郎（2010）「日本語形態論における漢語の特異性」大島弘子・中島晶子・ブラン ラウル編『漢語の言語学』1-17. くろしお出版.

小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房.

Harley, H. (2008) “The bipartite structure of verbs cross-linguistically, or, Why Mary can't exhibit John her paintings.” In Thaïs Cristófaro Silva and Heliana Mello (eds.) Conferenciers do V Congresso Internacional da Associação Brasileira de Lingüística: 45-84.

Levin, B. and M. Rappaport Hovav (2006) “Constraints on the Complexity of Verb Meaning and VP Structure.” In H.-M. Gaertner et al. (eds.), *Between 40 and 60 Puzzles for Krifka: A web festschrift for Manfred Krifka*.

Nishiyama, K. (1999) “Adjectives and the copulas in Japanese.” *Journal of East Asian Linguistics* 8(3): 183-222.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 今井 忍	４．巻 51
２．論文標題 動詞述語における語種と形態的複雑性 ：「～する」「～中」「～済み」に前接する語を中心に	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本語・日本文化	６．最初と最後の頁 17～38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/95212	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Shinobu Imai
２．発表標題 On the “Extended” Morphosyntactic and Semantic Features of Sino-Japanese Verbs and Native Japanese Compound Verbs
３．学会等名 19th International Morphology Meeting（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 今井忍
２．発表標題 動詞の語種とそれが生起する構文－意味論的分析
３．学会等名 国際シンポジウム「グローバル化時代における日本語教育と日本研究 」（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 今井忍	４．発行年 2018年
２．出版社 Vietnam National University Press	５．総ページ数 598
３．書名 グローバル化時代における日本語教育と日本研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関